

地域保健管理における青年女子及び妊婦貧血の医療と指導に関する研究

—女子の発育・成長と貧血との関係、特に妊娠・分娩に及ぼす影響について—

分担研究者	松山栄吉	(東京厚生年金病院・産婦人科)	40
研究協力者	平山宗宏	(東大・医・保健学科 母子保健学)	50
	宮原忍	(")	
	星山佳治	(")	
	阿部昭治	(東洋信託銀行東京診療所)	30
	本多洋	(三井記念病院・産婦人科)	30
	厚木牧恵	(")	
	伊藤桂子	(愛知県衛生部)	30
	田中茂	(埼玉県労働保健センター)	30
	前田和子	(")	
	荒尾静代	(東大・医・公衆衛生学)	

はじめに

女子が妊娠すると血色素値およびヘマトクリット値が低下し、いわゆる妊娠貧血を生ずることはよく知られている。またその発生機序も、循環血漿量の増加に伴う相対的な血色素値の低下であって、ある程度は生理的現象であることも周知の事実である。したがってWHOの規定した11.0g/dlを基準にとると、妊婦の $\frac{1}{3} \sim \frac{1}{2}$ が少なくとも一度は貧血に陥ることになり、逆にこの基準が医学的に合理的であるかどうかが問題となろう。

しかし過去において、妊婦の貧血が放置された時代に、妊娠中毒症、分娩遷延、分娩時異常出血、新生児仮死などの異常が多発したことも事実であるし、生理的現象ですべてを見過ごすわけにはいかない。現在のように妊娠貧血に広範囲に鉄剤が投与されると、少なくとも以前のような合併症が著しく減少したことも事実である。

また、貧血は妊娠以外の原因によっても発生する 경우가多く、とくに妊娠・分娩・育児の仕事を担当する女子が、月経の発来とともに貧血の頻度が増すことも、母子保健学的に持つ問題は大きい。したがって成長期にある青年女子の血色素値をどのようにして正常範囲に保つかも大きな課題であ

る。

食事、勉強、スポーツ、職業、日常生活などの社会環境因子は、貧血にも直接、間接にいろいろな影響を与えていることがよく知られており、これらの因子は年ごとに変化して行くために、その影響の年次的な推移を知ることも重要である。

したがってその実態を逐次把握しておく必要がある。

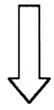
今回第2年目の研究として、研究協力者が各グループごとに、前年度に引き続いて現状の調査と分析を進めた。今後それらを総括し、それが地域医療に反映するような要点をまとめた。

母性保健的視点より見た青少年及び妊婦の貧血

平山宗宏 (東大医学部保健学科 母子保健学教室)

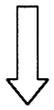
1 女子学生に於ける身体の成長と貧血

妊娠中に発見される貧血は、その発生時期をしらべると、妊娠前より存在したと推定される場合が少なくない。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



はじめに

女子が妊娠すると血色素値およびヘマトクリット値が低下し、いわゆる妊娠貧血を生ずることはよく知られている。またその発生機序も、循環血漿量の増加に伴う相対的な血色素値の低下であって、ある程度は生理的現象であることも周知の事実である。したがって WHO の規定した11.0g/dl を基準にとると、妊婦の1/3~1/2が少なくとも一度は貧血に陥ることになり、逆にこの基準が医学的に合理的であるかどうかが問題となろう。

しかし過去において、妊婦の貧血が放置された時代に、妊娠中毒症、分娩遷延、分娩時異常出血、新生児仮死などの異常が多発したことも事実であるし、生理的現象ですべてを見過ごすわけにはいかない。現在のように妊娠貧血に広範囲に鉄剤が投与されると、少なくとも以前のような合併症が著しく減少したことも事実である。

また、貧血は妊娠以外の原因によっても発生する場合が多く、とくに妊娠・分娩・育児の仕事を担当する女子が、月経の発来とともに貧血の頻度が増すことも、母子保健学的に持つ問題は大きい。したがって成長期にある青年女子の血色素値をどのようにして正常範囲に保つかも大きな課題である。

食事、勉強、スポーツ、職業、日常生活などの社会環境因子は、貧血にも直接、間接にいろいろな影響を与えていることがよく知られており、これらの因子は年ごとに変化して行くために、その影響の年次的な推移を知ることも重要である。したがってその実態を逐次把握しておく必要がある。

今回第2年目の研究として、研究協力者が各グループごとに、前年度に引き続いて現状の調査と分析を進めた。今後それらを総括し、それが地域医療に反映するような要点をまとめた。